

新羅僧元暁と義湘伝

——『華嚴縁起』を中心に——

金 任 仲

はじめに

元暁と義湘は、韓国仏教史の上であまりにも有名で新羅を代表する偉大な人物であると言えよう。元暁（六一七〜六八六）は新羅を乗り越えた普遍的な思想を樹立し、中国と日本にその影響を及ぼした思想家として知られている。新羅の名僧元暁は、義湘と共に唐へ留学の途にいたが、途中で塚に宿り、万法は一心より生起するといふ華嚴の唯心の原理を自ら開悟し、その志をひるがえして入唐を断念したという。元暁は伝説の上では怪奇の行跡を以て語られることが多いが、その学問的業績は「奈

良朝現在一切経疏目錄」によると、六十余部に及ぶ著作が日本に伝来し書写され、日本仏教の成立に元暁の思想的影響が如何に大きかったかを十分に想像できる。現在はその著作のうち、二十二種のみ伝わっている。義湘（六二五〜七〇二）は初志を貫いて入唐し、中国華嚴宗の第二祖智儼の門下で華嚴教学を大成した。帰国後、太伯山に華嚴の根本道場浮石寺を建てて華嚴宗を宣揚し、海東華嚴の初祖と仰がれた。特に義湘が唐に留学する際に出会った善妙との説話は日本に伝えられ、高山寺の明恵上人に大きな影響を与えた。

一方、明恵（一一七三〜一二三二）は鎌倉時代に華嚴宗の復興に力を注いだ僧であるが、時空を越えて七世紀

の新羅の高僧元暁と義湘に深く傾倒していた。明恵は、異国人である元暁と義湘を「華嚴宗の祖師」として尊崇の念を抱き、『華嚴縁起』という絵巻まで作っている。

京都の高山寺所蔵『華嚴縁起』(国宝、『華嚴宗祖師絵伝』とも呼ばれる)は、元暁と義湘という二人の伝記と説話を題材としたもので、中国・日本でもない新羅の元暁と義湘を華嚴宗の祖師として、優れた筆致で文学的に描いているのである。しかも、明恵が書いたとされる絵巻の詞書には二人の伝記や説話が詳しく語られている。本稿では、日本における元暁と義湘の伝記について、韓国と日本との文化交流という点に注目しながら、『華嚴縁起』絵巻を中心に考察してみたい。

一 『華嚴縁起』の伝来

さて、『華嚴縁起』は「義湘絵」と「元暁絵」という二つの祖師伝に分かれて構成されており、絵巻の詞書は『宋高僧伝』巻四「唐新羅国義湘伝」・「唐新羅国黄龍寺元暁伝」の本文を主な出典としている。この『華嚴縁起』の成立をめぐる、かつて梅津次郎氏³は義湘絵を明恵の善妙寺建立と関連づけて善妙寺に善妙像が安置された後

に絵巻が制作されたとし、元暁絵を明恵の光明真言信仰と深く関わっていることから明恵示寂以前の制作と見て、両絵巻の制作時期を貞応二年(一一二二)より、安貞二年(一一二八)前後になされたと推定された。しかし筆者は、義湘絵の成立は当事承久の乱によって肉親を失い、明恵のもとで帰依出家した女性達を善妙の故事になぞらえ、義湘にちなんで女人救済を行う目的として高山寺において作られたものとし、義湘絵を承久の乱(一一二二)以後より善妙寺創建(一一二三)以前の成立と考えている。また元暁絵の成立は、明恵が光明真言信仰の根柢を求めた元暁の著『遊心安楽道』と関連づけて、若い頃から思想や信仰の面で明恵の元暁への深い傾倒が絵巻制作の背景になっていると見て、明恵の『光明真言土沙勸進記』が完成された安貞二年以後二・三年の間になされたのではないかと推定される。

現存する『華嚴縁起』は、「義湘絵」三巻、「元暁絵」三巻、合わせて六巻本として保存されているが、これらの絵巻は元来義湘絵四巻、元暁絵二巻として制作されていたものであった。後崇光院の日記『看聞御記』永享五年(一四三三)六月十六日の条に、

十六日。晴。茶事東御方申沙汰如例。内裏御返上。

又一合被下。八坂法観寺塔縁起三卷。聖廟御絵六卷。

義湘大師絵四卷。青丘大師絵二卷被下為悦。八坂絵殊勝図也。

とあり、この「義湘大師絵四卷、青丘大師絵二卷」という二つの絵巻は、もとワンセットとして室町時代初期までに原形のまま高山寺の経蔵に伝来したものであることは間違いない。ここで「青丘大師絵二卷」は、元暁大師の行状絵二巻のことを意味しており、元暁は平安時代以降「青丘大師」として知られている。そして、明治十六年（一八八三）の修理に際して、義湘絵第二巻の裏打ちに施した紙の中から裏打書が発見されたが、それを掲げてみると、

華嚴宗祖師義湘大師絵四卷、元暁大師絵二卷、明恵上人絵三卷、以上九卷獸物絵上下同類間二卷開闢、都合廿一卷、本是高山寺東経蔵之具也、先年兵乱之時、

足軽共執散、為彼兵火、所焼失了、然坊人共拾集之間、此坊取置之、寺家有再興之時節、可令奉納彼蔵也、後世留守門人、可得其意、不可存私、仍取置之

也、時元龜庚牛七月廿一日羊僧□性。

と記されている。末尾の「元龜庚牛」は、すなわち元龜元年（一五七〇）のことで、この文書の作成年代を推察することができる。この裏打書によると、戦国時代の天文十六年（一五四七）細川晴元の兵乱の際に、足軽によって高山寺の東経蔵に収蔵されていた絵巻十一巻が持ち出され、焼け焦げてしまった絵巻を管理している寺の僧達拾集したということ述べている。この時に元来の絵巻六巻が破損し巻数が乱れ、錯簡が生じたものと見られるが、いつ修理を加えたのか明らかでない。

ところが、これらの修復がいつ頃に行われたのか、それを推測できる手がかりは寛永十年（一六三三）十月に作成された「笛入子六合目録てい」である。この目録は、慶安三年（一六五〇）に校合が加えられているが、その六合（眼・耳・鼻・舌・身・意）のうち「意」の箱に、

意

義湘大師絵四卷 不足 今度調三卷了 重可調本様
元暁大師絵貳卷 上下

とあり、江戸時代初期において「義湘大師絵四巻」は一巻分が明らかに不足を生じていた。この時点でやむをえず三巻分にしておいたが、これはあくまでも臨時処置であった。「重ねて本様（もとの形）に調ふべし」とは、再びもとの四巻分に復元しようという意味で、その後四巻に仕立て直されたことはなかったのである。さらに「元暁大師絵式巻上下」は、前掲の『看聞御記』や元亀元年の裏打書の記載と符合しているが、現在の形「元暁絵三巻」には齟齬するわけである。こうした記録から見て、慶安三年の頃に義湘絵を四巻に復原することをあきらめて元暁絵を三巻にすることによって、「義湘絵三巻、元暁絵三巻」という現在の形になったのではないかと考えた方が妥当であろう。

なお、現存する六巻本『華嚴縁起』に、錯簡が存在することについて早く気づいたのは八百谷孝保氏であった。八百谷氏は、『華嚴縁起』の「義湘絵」と「元暁絵」の詞書が、『宋高僧伝』に見える義湘・元暁伝の本文を踏まえていることに着目し、義湘・元暁の伝記を『宋高僧伝』に求めながら、現在の形からもとの義湘絵四巻、元暁絵二巻の形に絵巻の錯簡を補正する作業を丹念に行われた。しかしながら、『華嚴縁起』の詞書の出典とされ

る『宋高僧伝』の元暁・義湘伝は説話的要素が濃く、『三国遺事』など韓国側の史料が伝える実伝とは少し異なるようで、次に合わせて検討してみたい。

二 元暁の伝記

元暁の俗姓は薛氏、父は談捺乃末（奈麻）である。新羅真平王三十九年（六一七）に押梁郡の仏地村において生まれた。文武王元年（六六一）に、元暁は義湘と共に入唐する途中、塚に宿り鬻饅の中に入っていた水を飲んで、唯心の悟りを得て国に留まったという。『華嚴縁起』「元暁絵」の詞書には、元暁の出生から入唐までの完全な行状を語るものではなく、①鬼の夢に開悟して入唐を断念する話、②元暁の自由奔放な生活ぶり、③金剛三昧経の論疏を作って王妃の病気を癒した話が主な中心説話として描かれている。元暁絵の初めのところは唐へ向かった元暁と義湘が、塚屋で雨宿りする場面から始まる。元暁絵巻一第一段の詞書には、二人が古墳とは知らずに雨を避けるために一夜泊まったが、朝、目が覚めて見るとそれは墓であり、そばには人骨が散乱していたことを、次のように記している。

夜すてにあけてみれば、このつかや死人「の」はかなりけり。骸骨處々にあり鼻穢「きは」まりなし。しかれとも、大雨しきり「に降りて」、すゝみゆくにあたはずして、つきのよ「ここに」とまりぬ。黄龍大師、夢の中に異「相をみ」たり一の鬼物あり。そのかたちおそれ「おほし」。(中略)分別あれば種々「の法生し」心なければ種々法滅す。かくのごとく「思量す」るにふかく佛法の玄底を通達し「ぬ。分」別さかりなれば、自心これ第一のあたな「り。深」く心源をさとれば、心のほかに仏法なし。わ「れす」てに佛法甚深の道理を開悟しぬ。心の「ほか」に師をもとむへからずといひて、元暁は「本」國にと、まりたまひにけり。

この詞書中に元暁を「黄龍大師」と称するのは、元暁が出家した後、暫く皇龍寺(黄龍寺)に住居していたからである。そして、二人は雨のために古墳とは知らずに泊まった第一夜は何事もなかったのに、墓だと知った第二夜は元暁の夢の中で鬼が現れて安眠をさまたげた。その時、元暁は一切の現象はすべておのれの一心の変ずるところに過ぎないということを知り、元暁はみずから

「心の外に師をもとむべからず」と言つて、入唐を放棄し、国へ引き返したとする。絵巻の詞書の作者である明恵は、夢の体験を大事にして二十四歳から五十八歳までの長い間、自分の夢を『夢記』に記録し、解釈を施している。明恵は若い修行期に釈迦の遺跡がある天竺に憧れ、何回も留学を決行しようとするが、結局天竺渡航を断念したのも、春日明神の託宣が下ったためであり、鬼の夢によって唯心を悟り、新羅に留まったとする元暁の夢に明恵は強く心を惹かれたことと思われる。この元暁の夢に関する記述は、実際に『宋高僧伝』巻四「元暁伝」にはなく、「義湘伝」に見られるものである。

條於中途遭其苦雨。遂依道旁土窟間隱身。所_レ以避飄濕焉。迨乎明旦相視。乃古墳骸骨旁也。天猶霖霖地且泥塗。尺寸難_レ前逗留不_レ進。又寄延巖之中。夜之未央俄有鬼物為怪。暁公歎曰。前之寓宿謂土窟而且安。此夜留宵託鬼鄉而多_レ崇。則知心生故種種法生。心滅故龕墳不二。又三界唯心萬法唯識。心外無_レ法故用_レ別求。我不_レ入_レ唐。却携囊返_レ國。湘乃隻影孤征誓_レ死無_レ退。

明恵はこの部分を引用し、元暁の高徳を讃えて詞書に記していることは明らかである。『宋高僧伝』は、元暁が義湘と共に唐へ留学の途についたが、唐州界に至って雨のため、塚に宿ることになり、鬼に襲われる夢をみて、『三界唯心、萬法唯識』という唯心の原理を自ら体験し、仏法の根本を悟ったとする。しかし、この時の事情は韓国の古代説話と比べて、かなりの相違点が見られる。つまり、元暁は義湘と共に入唐求法の旅の途中、ある夜、塚に野宿した時に喉が渴いたので、手を延ばして水を飲んだが、翌朝起きて見るとそれは鬻體に入っていた水であったことがわかり、急に吐き気を催したという。昨夜は何とも思わなくて飲めた水も、一度鬻體の中に入っていた水とわかると、これを飲むことが出来ないのは、一切のものが心によって生ずるためであることを悟って、入唐を諦めたと言話として伝えられている。

この説話をめぐって、韓国側の史料を調べたところ、筆者の管見に入る限り見当たらず、古くから口伝として伝わるだけであると推定される。だが、中国側の史料である延寿撰『宗鏡録』卷十一と慧洪撰『林間録』卷上には、次のように詳しく記されている。

▼元暁法師義湘法師。二人同來唐國尋師。遇夜宿荒止於塚内。其元暁法師因渴思漿遂於坐側見。一泓水掬飲。甚美及至來日覩見。元是死屍之汁。當時心惡之吐。豁然大悟乃曰我聞佛言。三界唯心萬法唯識。故知美惡在我實非水乎。遂却返故園廣弘至教故無有不達。

（『宗鏡録』卷十一）

▼唐僧元暁者海東人。初航海而至。將訪道名山。獨行荒陂一夜宿二塚間。渴甚。引手掬水于穴中。得泉甘涼。黎明視之鬻體也。大惡盡欲嘔去。忽猛省嘆曰心生則種種法生心滅則鬻體不二。如來大師曰三界唯心。豈我欺哉。遂不復求師。即日還海東。

（『林間録』卷上）

元暁が入唐の途中、塚に宿り唯心の道理を悟って新羅に帰ったということについては、いずれの文献もまったく同様である。しかし、元暁絵の詞書と『宋高僧伝』は、元暁が古墳（墓）に野宿した時、その傍らには骸骨だけが散乱していたとすのに対し、『宗鏡録』『林間録』共に、元暁は夜喉が渴いたので塚の中にある淀みの水を手で掬って飲んだが、翌日これを見ると鬻體が入っていた水であったとする。また、元暁絵の詞書、『宋高僧伝』

『宗鏡録』は義湘と共に塚に泊まったとするが、『林間録』は元暁一人で塚の間に宿ったことになっており、それぞれ伝える内容が少し異なっているのである。

これと関連して、『三国遺事』巻四「元暁不羈」では元暁の塚における開悟の記述は見られないが、「其遊方始末、弘通茂跡。具載唐傳與行狀^④」とあり、元暁の伝記を記録した『唐伝』と『元暁行状』は、その当時まで伝わっていたことがわかる。恐らくそこには、元暁が骸骨に入っていた水を飲んで唯心所造の道理を悟り、入唐を放棄したという内容についても詳しく載っていたはずであろう。だが、現在は『唐伝』・『元暁行状』ともに散逸し、それを証明できる史料が存在しないため、知る由もない。但し、一つ言えることは、比較的早い時期に成立した『宗鏡録』巻十一の元暁伝の記事が、口伝として伝わる韓国の古代説話と非常に近似しており、その信憑性が一番高いと考えられる。

そして、義湘と別れて新羅に戻った元暁は、主に慶州の芬皇寺に住して仏法を忘れたかのように、自由奔放な生活を送っていた。元暁絵巻一第二段の詞書は、民衆とともに振舞う元暁をより親しみやすい人物として、次のように描かれている。

大師、そのうち、智恵ならひなく行徳「はか」りかたし。因明、内明、内外の典籍、すへ「て」通解せざることなし。(中略)或時は「巷間」にと、まりて、歌をうたひ琴を「ひきて」、僧の律儀をわすれたるかとし。或「時は」經論の疏をつくりて、大會の中にし「て」講讀するに、聴衆みななみたをな「かす」。或時は山水のほとりに坐禪す。禽「鳥」虎狼、おのつから屈伏す。かやうの「行ひ」すへて一邊にかゝえられさりけり。

『宋高僧伝』の当該部分には、「或撫琴以樂^三詞字。或閭閻寓宿。或山水坐禪^⑤」とあって、詞書において既に修飾がなされていることがわかる。元暁は、内外すべて典籍に通じ、智慧ならびない行徳の高僧となったが、ある時は巷間で琴を弾じて歌を歌い、ある時は經論の疏を作り講讀すれば聴衆は皆涙し、またある時は山水のほとりに坐禪するなど、その生き方は自由無碍の境地そのものであった。『三国遺事』では、「一切無碍人、一道出生道、命名曰無碍^⑥」と見え、元暁は自分だけの解脱を求めた仏教者ではなく、一般大衆を教化させるために奇妙な行動で自由奔放に振舞ったとし、元暁絵の詞書と相通

じるところがある。

この詞書の内容と関わる絵画には、元暁が琴を弾くところ、寺で講讀するところ、浜辺で月を詠ずるところ、山水の中で坐禅するところ、といった四つの場面に分けて描かれている。この内、山水の中で虎に囲まれ、元暁が坐禅を組む姿は宋画の羅漢図の伝統的な構図に近似すると指摘されている。また、弹琴・講讀・坐禅の三つの場面は、詞書と緊密な対応を示しているが、「元暁、月を詠じ給ふところ」の場面は、絵師の着想によるものであり、元暁が浜辺で月を詠ずるといふ情景が如何にも清澄な雰囲気を漂わせている。元暁絵の筆者は明恵の弟子成忍に擬せられているが、ここには制作者の明恵と絵師との間に親密な交感を窺わせるものがある。元暁が浜辺で月を愛でてゐる絵は、明恵が若い頃に修行した白上の峰から湯浅湾（現在の和歌山県）を見渡した風景と非常に似ているといわれ、梅津次郎氏は月を詠ずる元暁に明恵の投影を見るのである。それだけに、明恵は元暁の自由奔放な生活ぶりに、強い共感を持っていたのであろう。

続いて、元暁絵巻一第三・四段、巻二第一・二段、巻三第一・二段の詞書は、新羅王の王妃の病氣と関連して、奇跡を中心とした元暁の『金剛三昧経論』撰述の縁起説

話とも言える話が描かれている。それによると、元暁の名声が高まるにつれて彼を妬む者が現れる。ある日、新羅王は国家鎮護のため元暁を「百座の仁王会」に招こうとするが、その行儀が狂人のような振舞をするとの奏上を受け容れ、止むを得ずあきらめるのである。仁王会の直後、国王の王妃が病に臥したので、祈祷や医療など百万手をつくしてみたが、一向に効き目がなかった。そこで、新羅の勅使が方薬を求めて唐へ派遣され、その途中で不思議な老人と出会い、龍王の宮殿へ行き、龍王から『金剛三昧経』を授けられる。龍王は勅使に新羅へ帰ったら、先ず大安聖者という人に、この経を整理させ、元暁大師に経疏を作らせて講讀すれば、王妃の病は直ちに快癒すると言う。勅使は足の脛を裂き、その経を納めて王宮に戻り、新羅の国王は龍王の指示に従って、大安聖者に経典を届ける。大安聖者は、それを八品(章)と分け、この経を講じ得るのは元暁のみであると語る。それは、元暁絵巻三第二段の詞書に、

聖者のことは、龍宮の奏状にならねは、帝王いよいよ元暁の徳を信仰して、勅をくたして疏をつくりて、講讀あるへき宣旨あり。元暁勅をうけ給て五巻の疏

をつくり給。すてに行幸ありて講讚あるへき期にのそみて、そねみをなす人この疏をぬすみてけり。法師三日をのへて、又三卷の疏をつくりて、この經を講す。法師湛海の智をわかし懸河の辯をなかず聽衆みな希奇の思をなす。(中略) そのうち、きさきの御惱たちまちにいゑ給にけり。王臣、百官法師を敬重したてまつる事いよいよふかし。のちの學者その略疏を敬重して本論に准して金剛三昧論となつて世間にひろく流布せり。廣本も流布のよし傳文にのせたり。

とあり、龍王も大安聖者も一致して元暁に經疏を作らせるべしと言つたので、国王は元暁に勅命を下し、元暁は『金剛三昧經疏』五卷を作つた。しかし、元暁を妬む何者かによってこの經疏が盗まれてしまふのである。そこで元暁は三日間の延期を請い、あらためて三卷の經疏を著わして講讚し、その後、王妃の病は癒え、元暁は時の人々に尊敬されたという。これが現在伝わる『金剛三昧經論』である。この詞書と関連づけて、『宋高僧伝』「元暁伝」に、

此經以本始二覺爲宗。爲我備角乘將案几。在兩角之間。置其筆硯。始終於牛車造疏成五卷。王請剋日於黃龍寺敷演。時有薄徒竊盜新疏。以事白王。延于三日。重錄成三卷。號爲略疏。

と記され、『金剛三昧經』は本始二覺の旨を表わしていると説く。本覺とは、衆生に本来具有されている清淨な悟りの智慧であり、修行の進展によって本覺を明らかにすることを始覺という。元暁はこの經を寺院の講堂で講讚したのではなく、筆と硯を牛の二つの角に置き、牛車に乗って略疏五卷を著述したという。これは、牛の二つの角を二角(二覺)と喩え、この經には本始二覺の悟りが隠れていることを暗示したものである。『三国遺事』では、「亦因海龍之誘。承詔於路上、撰三昧經疏。置筆硯於牛之兩角上。因謂之角乘。亦表本始二覺之微旨也」と見え、「龍王」を「海龍」と記して『宋高僧伝』とほとんど同じ内容であるが、元暁絵の詞書には見られない。この元暁の『金剛三昧經略疏』は、中國に伝えられ、あまりに見事な出来ばえのために、菩薩が書いたものであらうと言ひ、『金剛三昧經論』と名づけられた。普通、

人間が書いたものなら「疏」というが、菩薩が書いたものだから「論」と呼ばれたのである。

また、『三国史記』卷四十六「薛聰伝」によると、元暁の孫にあたる薛仲業は新羅の勅使として日本にきたが、その時、薛仲業は祖父元暁の著『金剛三昧経論』を読んで感銘を受けた日本の「真人」（高官）から詩文を贈られたという。

世伝日本国真人。贈新羅使薛判官詩序云。嘗覽元暁居士所著金剛三昧論。深恨不見其人。聞新羅国使薛即是居士之抱孫。雖不見其祖。而喜遇其孫。乃作詩贈之。其詩至今存焉。但不知其子孫名字也。

これは、元暁の『金剛三昧経論』が中国のみならず、日本においても広く流布され愛読されたことを知り得る格好の史料である。高仙寺の「誓憶和上塔碑」の元暁碑文にも、「大曆之春大師孫翰林字仲業使滄溟□□日本彼国上宰因□語」とあり、大曆は唐徳宗の年号で新羅惠恭王十五年（七七九）に当り、元暁の孫薛仲業を新羅の勅使として、日本に派遣したことを証している。これに

符合する日本側の記事は、『続日本紀』宝亀十一年（七八〇）正月の条に「大判官韓奈麻薩仲業」と名が見え、元暁の碑文・『三国史記』によって「薩仲業」は「薛仲業」の誤記であり、薛仲業は新羅の勅使として来日し、日本の「真人」と交流していたことの傍証となる。

このように、元暁の学問や自由奔放な行状が日本に伝わり、奈良仏教に影響を及ぼしたことは看過できない。田村圓澄氏は日本における新羅仏教の影響に注目し、元暁の著書が日本に伝来され、日本仏教確立に大きな役割を果たしたことを指摘している。とくに元暁は時代を超えて鎌倉時代、高山寺の明恵によって高く評価され、贊寧撰『宋高僧伝』に基づいて『華嚴縁起』が作られたことを見ても、元暁が如何に偉大な人物であったか、その一端が知られよう。

三 義湘の伝記

義湘は新羅華嚴宗の第一祖。父は韓信、姓は金氏である。新羅眞平王四十七年（六二五）生まれ、二十歳の時に出家した。龍朔元年（六六一）に入唐して智儼につき、中国華嚴宗第三祖法蔵とともに華嚴教学を学んだ。義湘

と元暁は華嚴を学ぶ同学の友として、入唐を志したこと
もあって共に語られる場合が多く、年齢的には元暁が八
歳年長である。

「義湘絵」の詞書は、唐に入った義湘に恋情を抱いた
善妙との出会いから、善妙がかなわぬ恋を宗教的に昇華
して身を捨てて大龍と化し、義湘の乗った船を守護して
新羅まで無事に渡せるとか、また、帰国後義湘の華嚴宗
の弘教を妨げる雑僧を善妙が大盤石となって追い払い、
義湘を擁護したという宗教的奇跡が絵伝の中心説話とし
て記述されている。義湘絵の冒頭部分にある巻一第一段
の長い詞書は「判釈文」と言い、破損が一番著しくて現
在は復元が行われ巻四に移された。その内容は様々な経
典を引用しながら、問答の形式で義湘の高徳と善妙の奇
跡の意味を説き明かしている。義湘絵の最初のところは、
元暁と義湘が人々に見送られて館を出発する場面から始
まる。続いて、元暁と義湘は塚に入って一夜宿る時、元
暁の夢に鬼が現れ、翌朝二人が別れる場面は元暁絵と重
複する。義湘絵巻一第二段の詞書の方は、「元暁法師ゆ
めのうちに鬼物におそはれて、心やすからすしておとろ
きぬ。もとより智者なれば、この時に甚心唯識の道理に
悟入す」とあって、元暁は唯心の悟りを得て国に留まり、

義湘は一人で唐へ向かったとし、元暁絵の詞書とほぼ同
じ内容である。

ところで、元暁と義湘の入唐時期や上陸地について、
『華嚴縁起』の詞書には見られない。詞書の典拠とされ
る『宋高僧伝』「義湘伝では、「湘乃隻影孤征誓死無退。
以総章二年附商船達登州岸。文衛到一信士家」とあり、
義湘が元暁と別れて、総章二年（六六九）商船に乗って
登州に到着し、一信士の家に泊まったと伝える。しかし、
この二人の入唐時期について、『三国遺事』「浮石本碑」
によると、

永徽元年庚戌、與元暁同伴欲西入、至高麗、有難而
廻龍朔元年辛酉、入唐、就学於智儼、総章元年、儼
還化。咸亨二年、湘來還新羅。

とあり、義湘は永徽元年（六五〇）に二十六歳で元暁と
共に入唐の志を立てて出発したが、高句麗において災難
にあい、国へ戻ってから再び龍朔元年（六六一）に三十
七歳で入唐して終南山至相寺に行き、智儼から教えを受
けたとなっている。『宋高僧伝』の伝える総章二年は、
「浮石本碑」に義湘の師智儼が既に総章元年（六六八）

に没したと記され、綏章二年に入唐とするのは間違いであろう。これと関連して『三国遺事』「義湘伝教」にも、

未幾西凶覲化。遂與元曉道出遼東。辺戍邏之為謀者。

囚閉者累旬。僅免而還韓本傳及續傳。永徽初。会唐使舩有西還者。寓載入中国。初止揚州。州將劉至仁請留衙内。

供養豐贍。尋往終南山至相寺謁智儼。(中略)儀鳳元年。湘帰太白山。奉朝旨創浮石寺。

と見え、一度は元曉と一緒に遼東の辺境に着いたが、高句麗の守備兵に捕らえられて監禁され、数日後釈放されて本国に戻り、その後、永徽元年に唐勅使の帰国船に乗って中国に入り、最初は揚州に至って、州將の劉至仁の家に泊まり、そこで供養を受けたと記されている。この記事は、説話的要素が多い『宋高僧伝』とは違って、崔致遠の『浮石尊者伝』や『元曉行状』に拠ったことを明かしており、信じてよいと思う。すなわち、「浮石本碑」と『三国遺事』の記事に従って、一度目は永徽元年に元曉と共に入唐を企てたが失敗し、二度目は龍朔元年に陸路で唐へ行くことは危険であると考え、唐勅使の船に乗って揚州に上陸し、一人で唐に入ったと見たほうが妥当で

あろう。さらに、元曉が骸骨の中に入っていた水を飲んで唯心の道理を悟り、国へ引き返したのはおそらく二度目の入唐時期ではないかと推定される。

義湘絵では、やがて義湘の船が「唐の津」に着き、義湘が人の門戸の前に立ち物乞いをするうちに、そこで善妙と出会う場面から描かれている。それは、義湘絵巻二第二段の詞書に、

義湘のふね、すてに唐の津につきて、さとにいたりて乞食するに善妙といふ女人あり。かたちいづくしききこえかたし。義湘又美容の人なり。威儀安詳として、門戸にたちて食を乞ふ。善妙、これを見てこひたるまゆをあげ、たくみなるこゑをいたして、法師にまふしていはく、法師たかく欲境をいて、ひろく法界を利す。(中略)ねかはくは慈悲をたれてわか妄情「を」とけしめたまへといふ。法師このことはをき、そのよそおいをみるに心かたきこといしのことし。

とあり、善妙という美しい女性が、義湘の美容に恋情を抱いて恋を告白する。義湘は善妙に、自分は僧として戒

律と仏法のために身を捨てていると語り、「心堅きこと石の如く」その誘惑にまったく動じなかった。この言葉を聞いた善妙は、俄かに大願を發し、生まれ変わっても法師と共に離れず、「法界の衆生を利す」と誓いをたてる。その後、義湘は長安の都へ行き、至相大師のもとで華嚴教学を学ぶのである。善妙が恋を打ち明けるこの場面を『宋高僧伝』には、「名曰善妙。巧媚譎之。湘之心石不転也」とあるだけで簡単に済ませている。だが、詞書においては翻案が加えられており、明恵は善妙についてよほどの関心を持っていたに相違ない。日本仏教史上、一生不犯の聖僧として評価された明恵も、若い頃から美貌であったため、女性信者に慕われたことを思うと、義湘のような経験は一度ならずであったと思われる。『梶尾明恵上人伝』には、「タビタビ既ニ姪事ヲ犯ントスル便リアリシニ、不思議ノ妨アリテ、打サマシ打サマシテ、終ニ志ヲ遂サリキ」と語られているように、生々しい戒律との苦闘を経験した明恵にとって、義湘のような立場には、身につまされるものがあっただろう。

文武王十年（六七〇）、唐で十年に亘って仏教学を研究した義湘はついに帰国することになる。それを聞いた善妙は、義湘に贈る法衣や道具を整えて港へ駆けつけて

みると、義湘の船は既に港を出た後であった。善妙は慟哭し、「わかこの供具をはるかにおくりつけたまへ」と願ひ、箱を海中に投げ入れる。箱は空中を飛んで、忽ち義湘の船に踊りいった。この奇跡を見て善妙は、来世を待たず、今生において大師を助けて荒波の海から本国まで無事に送り届けようとの大願を發し、荒れる波に身を躍らして飛び込んでしまう。すると、善妙は瞬時に大龍と化して船を背負って海を渡る。絵では、義湘の乗った船に追いついた大龍は、船を背中に負い、悠々と荒海を渡って行く場面がダイナミックに描かれている。明恵はこれを義湘と善妙との仏法の不思議な因縁によるものであるとし、義湘の高徳と善妙の愛心を讃えながら、義湘絵巻一第一段の詞書において、次のように語っている。

不思議の人法につけて古今つねにあ「るもの」なり。いはんや仏法の不思議は因縁和合し「ぬ」れば、いかなることもありかた「きにあらず」。「善」妙も義湘大師にあらずして、他人「を因」縁として、はいかなる愛敬の心をおこす「とも、そ」の奇特を現しかたし。したれば、善妙「か」なれとも、すなはちこれを大師の徳「とす」。「か」の大師をほめたてま

つる文には、介鱗「船」を負て、とく海瀾をわたる。鉅石そらにう「かひ」おおひて、寺山をまほるといふ。この「事によ」りて、浮石大師の名をえたまへり。

ここでは長い問答体の説明が続いており、こうした奇跡が実際に起こり得るか、という質問に対して、明恵が答えたものである。明恵は、いくら師に徳があっても弟子に信がない時は、如何とも成し難い。両者相俟ってはじめて成就するのであるという。また、世の中には女の執着によって大蛇となる話はいくらでもあるが、善妙の場合はそれとは違ふと強調する。たしかに善妙は、煩惱の成すところがあったとしても、それを機縁に誓願を立て、大龍と変身して仏法を守護したのである。傍線部分には、『宋高僧伝』の義湘伝に「扶翼舳艫到國傳法」とのみ記されているが、義天撰『円宗文類』巻二十二「海東華嚴始祖尊者讚并序」の中に、「善妙有色、受戀求欲、見心匪石、反誓行壇、金鱗負艦、利涉海瀾、鉅石浮空、蓋護寺山」と、義湘と善妙に関わる記事があり、明恵はこれを参照して詞書に記していると思われる。詞書中に見える「かの大師をほめたてまつる文」とは、おそらく

義天撰の『円宗文類』に記された義湘を讃える文を指しているであろう。

その後、新羅に帰国した義湘は華嚴教を広めるための勝地を求めたが、そこには既に五百を超える小乗の雑僧が住居しており、これでは弘教の障害になると考えていた。その心を知った善妙が神通力を發揮して、今度は方一里ばかりの大盤石に化身し、寺の上を飛び回ったので、寺の僧達は慌てて逃げ去った。そこで義湘は、ここを本拠地として始めて華嚴教を説いたのである。この話は、元曉絵巻二第三段に綴られ、散逸した義湘絵四巻の一部分であるといわれたが、現在は本来の位置に復元されている。

すてに新羅にいたりて、大師、大教をひろむる勝地をもとむ。一の山寺あり。五百余の僧衆あり。小乗の雑学のところばり。大師これを巡見して、このやまは勝地なり。この雑学の僧なくは華嚴教をひろむるにたえたるへしといひて、思惟したまふ気色あり。善妙、大願のちからによりて、大神通を具足して、つねに大師にしたがひてたてまつりて守護をなす。その御心をしりて、化して方一里の大盤石となりぬ。

てらの上にとひありきておちぬするに、諸僧とる物もとりあえず、四方ににけちむれば、(中略)この因縁によりて義湘を浮石大師となつてまつれり。

この段では、新羅に帰国した義湘が浮石寺を創建してから華嚴を広めるまでの活動が描かれている。義湘絵の詞書と『宋高僧伝』には、寺の名は記されていないが、

空に巨石が浮いたという浮石にちなんで「浮石寺」と名付けられ、この因縁により、義湘は「浮石大師」と称されたという。現在、栄州浮石寺には、善妙が大盤石と化したという巨石と、石籠・善妙井・善妙堂が保存され、義湘と善妙との説話が存在していたことを物語っている。義湘絵には、善妙が大盤石となって小乗の雑僧を追い払ったという劇的な場面はなく、「大師、山寺にかはりゐて、講説したまふところ」とあって、義湘が新羅に帰って開いた大道場で多くの僧俗に囲まれて講讃する場面は、元暁絵巻二に混入されている。

こうした義湘と善妙に関する説話は、海を渡って日本に伝えられた。明恵は、『宋高僧伝』に出てくると義湘と善妙との説話にちなんで、当時承久の乱(一一二二)で夫を失った未亡人達のために、高山寺の南に尼寺を建

立し、この寺を善妙寺と名付けて女人救済を行なったのである。さらに『高山寺縁起』では、「善妙明神者、新羅之国之女神也、以女身依有花嚴擁護之誓、故勸請了」とあり、善妙を華嚴擁護の新羅の神として善妙寺に祭られ、信仰されていたことを考えれば、明恵における善妙説話の影響の程を窺い知ることができる。

おわりに

以上、日本における元暁・義湘伝について、韓国側の史料を参照しながら、『華嚴縁起』絵巻を中心に考察してみた。『華嚴縁起』は明恵によって制作され、「華嚴宗の祖師の絵」と題されたものである。華嚴宗の祖師伝の絵であるならば、当然中国華嚴宗の祖師である智儼や法藏の伝記か、あるいは日本華嚴宗の開祖審祥や良弁の伝記を題とした方が、より効果的であったらう。にもかかわらず、明恵は新羅の高僧元暁と義湘を華嚴宗の祖師として尊崇の念を抱き、二人の伝記を主題としているのである。何故、時と空を越えて七世紀の新羅の高僧を題材とする必要があったのだろうか。それは、元暁が鬼の夢を見て唯心の悟りを得て国に留まり、『金剛三昧経論』

を著述して王妃の病氣を治癒するなど、一般大衆を教化させるために自由奔放に振舞ったこと、また義湘は戒律を守って華嚴の教えを学び、帰国の折り、善妙が大龍と化して船を新羅まで無事に渡せ、帰国後は大盤石となり、華嚴教を擁護したという元暁と義湘の宗教的行為や宗教的奇跡に対する明恵の讚嘆と共感が、絵巻制作の動機になっていると考えられる。

華嚴宗の復興に力を注いだ明恵は、元暁と義湘に親密感を抱き、彼らの中に自分の姿を見出し、二人の主人公の名を借りて、明恵自身の思想と体験を語るためでもあったと思われる。華嚴宗の大衆布教を目的に、明恵は元暁と義湘の行状を分かりやすい絵巻物にすることが不可欠だったのであろう。『華嚴縁起』の「元暁絵」と「義湘絵」の巻頭には、明恵みずから「これは華嚴宗の祖師の絵なり。きたなき所に置きて御覧すべからず。又は、狼藉の絵に入れ、混ぜらるべからず」と記し、明恵がこの絵巻に対してどれほど愛着を持って、大切に保管していたのか充分に知られよう。

《注》

- (1) 石田茂作「奈良朝現在一切経疏目錄」『写経より見たる奈良朝仏教の研究』所収（東洋文庫、昭和三九年）付録一、一五六頁参照。
- (2) 現在『華嚴縁起』絵巻は毀損の恐れもあって、今は京都国立博物館に委託保管されている。
- (3) 梅津次郎「義湘・元暁絵の成立」『絵巻物叢考』所収（中央公論美術出版、昭和四三年）一四五～一五七頁。
- (4) この『華嚴絵巻』絵巻の成立に関しては、拙稿『華嚴縁起』の成立をめぐる（『佛教学』二九、平成十五年）を参照していただきたい。
- (5) 『看聞御記』下（『続群書類従』補遺第二）四頁。
- (6) 小松茂美編『華嚴宗祖師絵伝』（続日本の絵巻八、中央公論社、平成二年）八〇頁。
- (7) 堀池春海峰他編『高山寺遺文抄』（三笠出版、昭和三年）一九八頁。
- (8) 八百谷孝保「華嚴縁起絵詞とその錯簡に就いて」（『画説』一九）二九九～三三二頁。
- (9) 小松茂美編『華嚴宗祖師絵伝詞書訳文』（『華嚴宗祖師絵伝』所収、日本絵巻大成十七、中央公論社、昭和五三年）。以下、引用する「元暁絵」「義湘絵」の詞書の本文は、すべてこの書による。
- (10) これは、『八十華嚴宗』『十地品』の「三界の所有、唯是れ一心なり」に由来するもので、『六十華嚴経』『夜摩天宮品の「一切世界中、無法而不造、如心仏亦爾、如仏

衆生然、心仏及衆生、是三無差別」と合せて、華嚴教学の核心となる「唯心思想」を明瞭に説いている偈文を踏まえたものである。『六十華嚴経』（大正蔵卷九、四六五頁）。

(11) 『宋高僧伝』『義湘伝』（大正蔵卷四九）七二九頁。

(12) 延寿撰『宗鏡録』卷十一（高麗大蔵経卷四四、東国大
学校、昭和五一年）六二頁。

(13) 慧洪撰『林間録』卷上（国訳禅学大成、二松堂書店、
昭和四年）八頁。

(14) 一然『三國遺事』（乙酉文化社、平成四年）三三三頁。

(15) 注(11)前掲書「元曉伝」、七三〇頁。

(16) 注(14)前掲書「元曉不羈」、三三四頁。これは、『六十
華嚴経』『菩薩明難品』に「文殊常法爾、法王唯一法、
一切無碍人、一道出生死」（大正蔵卷九、四二八頁）と
見え、元曉はこの偈文に基づいて衆生を教化させるため
に、「円融無碍」の境地を表白したものである。

(17) 中島博「明恵上人樹上坐禅像の主題」（『明恵上人高山
寺』所収、同朋舎出版、昭和五六年）二七二〜三二八頁
参照。

(18) 梅津次郎「華嚴縁起——二人の新羅僧の恋と修行の物
語——」、注(17)前掲書、三三九〜三四三頁参照。

(19) 注(11)前掲書「元曉伝」、七三〇頁。

(20) 注(14)前掲書「元曉不羈」、三三四頁。

(21) 金富弼『三國史記』（乙酉文化社、平成四年）三六〇
頁。

(22) 『朝鮮金石総覧』上（国書刊行会、昭和四六年）四二

頁。

(23) 『統日本紀』（『新訂増補国史大系』二卷）四五五頁。

なお、「韓奈麻」とは新羅十七官等の第十一等級であり、
『統日本紀』に薛仲業は新羅の勅使として金蘭孫と共に
来日したと記されている。

(24) 田村圓澄『アジア仏教史』日本編Ⅰ（佼成出版社、昭
和四七年）一一七〜二〇頁。同『古代朝鮮と日本仏教』
（講談社、昭和六〇年）一五六〜一五七頁参照。

(25) 『三國遺事』『義湘伝教』には、「年二十九、依京師皇
福寺落髮」と記され、義湘の出家を二九歳の時とするが、
ここでは「浮石本碑」の貞観十八年（六四四）、二十歳
頃の出家説に従う。

(26) 注(11)前掲書「義湘伝」、七二九頁。

(27) 注(14)前掲書「前後所蔵舍利」、二四六頁。

(28) 注(14)前掲書「義湘伝教」、三三二頁。

(29) 『梅尾明恵上人伝』（高山寺資料叢書『明恵上人伝資料
第一』所収、東京大学出版会、昭和五八年）三四九頁。

(30) 明恵は『華嚴縁起』の詞書に、「かの男女執着のみち
に貪欲にひかれて大蛇となりて男おふためしきこゆ」と
記し、道成寺の物語を意識して語っていると見られる。

すなわち、明恵は女の執念により、蛇となって男を追う
「紀伊国の女」の行為と、深心をもって宗教的に昇華し
て龍に化した善妙の話とは、本質的に相違があることを
強調しているのであろう。なお、女が蛇となった話を語
る『道成寺縁起絵巻』は、『法華験記』下巻一二九「紀
伊国牟漏郡悪女」や『今昔物語』卷十四「紀伊国道成寺

僧写法花救蛇悟」と、『元亨釈書』卷十九の説話に依拠したとされる。

(31) 義大撰『円宗文類』卷二二(日本統感経五八) 五五六頁。

(32) 若杉準治『華嚴宗祖師絵伝』(日本の美術一〇、至文堂、平成一二年) 三一頁。

(33) 『高山寺縁起』(高山寺資料叢書『明恵上人伝資料第一』所収、東京大学出版会、昭和五八年) 六五六―六五七頁参照。

(34) なお、明恵が中心となって収集書写した、建長二年(一二五〇)成立の『高山寺聖教目録』には、元暁の著書十九種と義湘の『華嚴一乘法界画』一巻が収められており、明恵における元暁と義湘の思想的影響も、『華嚴縁起』絵巻の制作背景として無視できないと思われる(高山寺資料叢書『高山寺古典籍纂集』所収、東京大学出版会、平成九年)。